

「あゝ 教科書が教えない日本語」山口謠司

中公新書ラクレ 山川晃史

第3章 国語の授業は謎だらけ (p. 149-p. 197)

- ・消えた「ゐ」「ゑ」 現代仮名遣い 内閣告示
発音が簡単→語彙数の減少→説明力、表現力の低下

「国語」教育の根元的な歴史とその精神性を考える

- ・「国語」とは？

なぜ、「日本語」ではないのか？
高校国語の教育課程「論理国語」の出現

「国語」は、「不条理の世界」を、
どう生き抜くかという「方法」を学ぶための「科目」

- ・言葉は道具、言葉は武器
- ・「国語」と「日本語」との違い
 - 文法や語法の学習は、「国語」「日本語」の学習である
 - 「日本語」による思考方法である
 - 「日本語」を母国語として東アジアの弧状列島に住む「日本」を国家として成り立たせるための意識でもある

- ・「日本」および「日本人」は、「日本語」という「母国語」を使って、
独特の文化を創り出した特殊な存在

- 例①正倉院の宝物
- ②源氏物語
 - ③浮世絵
 - ④明治維新

「国語」という教科は、「日本」という「国家」がどのように
創られ、今後どのように守り、創っていくべくかを考える学習
だと考えることができる (p.158)

- ・フランスの「国語」教育
- ・バカロレアの話 「哲学」「思考」 日本にはない一貫した「哲学的思考」

・国語教科書の歴史

- 第一期国定教科書 1904年～ 資本主義興隆期の比較的近代的教科書
- 第二期国定教科書 1910年～ 家族国家観に基づく帝国主義段階の教科書
- 第三期国定教科書 1918年～ 大正デモクラシー期の教科書
- 第四期国定教科書 1933年～ ファシズム強化の教科書
- 第五期国定教科書 1941年～ 決戦体制下の軍事的教科書
時代によって内容も変わる

・当用漢字と現代かなづかい

「当用漢字表の実施」「現代仮名づかいの実施」(1946・内閣訓令・告示) ←GHQ
山本有三、安藤正次

・「表音派」の歴史

・デジタルのテキスト

「価値観の平板化」

「便利さ」「検索可能」→「記憶力」と「連想力」の衰退

・文法の知るメリット

・音読の重要性

声に出して本を読むということを超えて自分の思いを人に伝えるための言葉を育むための訓練

滑舌がよくなる

語彙力の増加→説明力がつく

【感想】章のタイトルには、「国語の授業は謎だらけ」とあるが、意味不明。筆者の「国語」の定義から考えれば、「謎」になるのかもしれないが、それならば、「国語の授業」が「謎」なのではなく、「国語」という教科や教科書が「謎」だというべき。

第四章 濁音の不思議 (p. 199-p. 248)

○五十音図 平安時代に作られる (第五章)

「母音」と「子音」の意識←明治時代以降

「濁音」は、ない。→なぜないのか (p. 208～) →未解明

「濁音専用表記の仮名はない」

○「呉音」→「漢音」へ 桓武天皇

・言葉の変化のタイムラグ

○カタカナの誕生 漢文を読むための補助記号 「於乎止点」→カタカナへ

・書体の問題

- ・同音異義語

○濁点【゛】の源流 中国の「声点」

- ・濁音の発音
- ・回文
- ・本居宣長の発見 日本語には濁音で始まる言葉がほとんどない
- ・連濁 「たけ」 + 「さお」 → 「たけざお」

○発音の急激な変化 2000年以降の変化

「早く鋭い音」「母音の響きを聞けない」

- ・平家物語の濁音

【感想】この章も、話題が行ったりきたりして、文章の流れとしては読みにくい。「濁音の不思議」という章なので、「五十音図に濁音がないのはなぜか」「濁音専用表記の仮名がないのはなぜか」という疑問を解き明かす流れでよかったのではないか。

筆者がそうしていないのは、おそらく、根底にある「国語」の考え方から来ていると思われる。

第五章 五十音図の功罪 (p. 249-p. 298)

○五十音図引きの辞書 『言海』大槻文彦編 サンスクリット語の配列と同じ辞書

- ・いろは歌の誕生 平安時代 (1079)
- ・五十音図の誕生 平安時代 (1093) 明覚『反音作法』 ×空海
仏教経典読誦の発音をサンスクリット語に近づけようとした。
- ・空海と真言宗

○言葉の二面性

いろは歌＝情け 五十音図＝論理、システム

- ・悉曇学のこと
- ・比較言語学
- ・膠着語としての日本語

「五十音図」は指標に過ぎない

→ 「絶対」ではない 便宜的な象徴的文字指標

- ・「ん」の音 「ん」の音は特定できない

・「誤用」→「正しいことに」

○五十音図を作り替えてみよう

- ・日本語表記の可能性
- ・連声
- ・苦痛な国語の授業

○日本語の消滅危機

「てにをは」は残っても、語彙は中国語、ヨーロッパの言葉に置き換わり、日本語が創り出した情緒や日本独自のロジックが消える

【全体を通しての感想】

- 「話」があちこちにとんで、「主題」と直接かかわりのないことが多く書かれている。
- ひとつひとつの話題は緻密で、専門的であるが、全体の文章としての「主張」は、分からないことが多い。
- 「国語教育」のとらえが理解できない（これはわたしの「国語観」との違いが大きい）
- 「あゝ」などの発音は、擬音語や叫び声が中心。一般的な名詞、動詞、形容詞には今後も表記されるとはならないと思われる。
- 歴史から未来への展望まで、さまざまな観点から書かれており、「新書」としては、これでいいのだろうが、「テーマ」をいくつかに分ける形でより専門的なものを読みたい。